（様式１）

学力向上のための重点プラン【小学校】

新宿区立淀橋第四小学校

■　学校の共通目標

授業作り	重点	○児童の「意欲を高める」「理解を深める」授業を実践する。基礎的・基本的な学力を確実に定着させるとともに、それを活用し主体的・対話的な授業を充実する。	中間評価	○児童の「意欲」や「理解」を高めるために、ねらいを達成させるための活動の精選、じっくり考える時間の確保、ICT 機器を使った授業を実践し、主体的・対話的な授業の充実に向けて授業改善に努めている。	最終評価	
環境作り		○一人１台タブレット型パソコンを効果的に活用し、個別最適化された学び・協働的な学び・家庭と連携した学び等の充実を図る。ICT 機器を効果的に活用し、児童の驚きや発見を導き、理解を深める。ユニバーサルデザインの視点から個に応じた学びの充実を図る。		○校内でタブレット端末の活用方法の研修を行っている。今後も ICT 機器を活用し個に応じた指導を実践していくために、教員相互が情報交流を行っていく必要がある。		

■　学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10 月）	課　題（10 月）	改善のための取組（10 月）	最終評価（２月）
1	国語	学ひらがなの読み方や書き方については、概ね理解している。 学促音・拗音の習得に課題がある児童がいる。 学文章を読み、根拠となる部分を基に読み方を工夫することについては、指導をし始めている時期にある。	・平素よりひらがなを使い続けることで、概ね理解はしているが、書くことに慣れてきてだんだんと筆順や画の途中・終わりの気を付けるべき点がおろそかになっている。いつでも丁寧に書くよう指導する必要がある。 ・書いた言葉や文を読み返す習慣が身に付いておらず、促音・拗音を抜かしたまま完成したと思い込んでしまう児童がいるのが課題である。 ・文章を読み、登場人物の様子を想像しながら読む児童が多いが、思いつきで読み方を考え、文章の内容にそぐわない読み方になってしまうことが課題である。	・聴写テストを行い、促音や拗音などの誤字脱字がなくなるように指導する。 ・タブレット端末のドリル機能を活用し、モジュールの時間等に取り組ませることで、字形や点画の注意点が身に付くよう指導を続ける。 ・言葉や文を書いたら読み返すように指導をする。また、読み返したものを確認し、正しく書けたものを認めたり一緒に間違いを正したりしていく。 ・文章の読み取りや、読み方の工夫を考える際には、根拠となる部分を文章中から探し出すよう指導をする。	
	算数	学加減計算については、概ね理解できている。 学文章を読み、立式する問題については、内容を正しく読み取ることが困難な児童がいる。	・加減計算については理解できているものの、手を使って計算しないと答えを導き出すことができない児童が見られる。 ・文章題の表す場面の様子を想像することができず、出てきた順番に数を使って立式してしまう児童が見られる。	・算数の授業の始めにマス計算の問題に取り組む時間を設けたり、タブレット端末の既習事項に取り組ませたりすることで、全ての児童が計算の習熟を図ることができるようにしていく。 ・文章問題の場面を理解できるよう、言葉の意味を確認し、計算の順序について考えられるようにする。また、問題文の必要な部分に印を付けることで、立式の際に助けとなるようにする。	

学年	教科	学習状況の分析（４月）	課　題（４月）	改善のための取組（４月）	中間評価・追加する取組（10 月）	最終評価（２月）
2	国語	学ひらがな、カタカナ、漢字について、概ね書くことができている。 学文を書くことについては意欲的な児童が多いが、習った漢字を使わずに文を書いたり、同じ読み方の別な漢字を使ってしまったりする様子が見られる。 学文章を読み、叙述に即して考えたり根拠となる部分を探したりすることについては、語彙力の差が大きく、言葉の意味理解が十分にできず、内容を正しく読み取ることが困難な児童もいる。	・繰り返し練習することで多くの児童に定着が見られた。しかし、とめ、はね、はらいが雑になってしまったり、忘れてしまったりすることが課題である。 ・新出漢字を習う際、漢字の成り立ちや意味、使用場面を十分に意識できていないことが課題である。 ・言葉の意味、理解が十分にできず、語彙力の差が大きいことが課題である。	・漢字や書写の時間にとめ、はね、はらいを意識した字を書くことができるよう指導する。また、どの学習においてもノートをきれいに書くよう、指導をする。 ・新出漢字を学習する際、成り立ちや意味を指導するとともに、言葉集めをしたり、その漢字を使った文を発表したりする時間を設け、漢字を使った文章力を向上させる。また、タブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。 ・文章の読み取りの時だけでなく、日常場面で使っている言葉の意味に着目させ、どのような意味かを説明し合ったり教え合ったりする場面を意識して意図的に設定する。	・どの学習においても、字をきれいに書くよう指導することで、意識してきれいに書くことができる児童が増えたが、漢字の細かい部分を正しく書けない児童が見られる。ベーシックタイムなどに、漢字の書き間違いしやすいポイントを指導し、正しい漢字を認識できるようにする。 ・タブレット端末のドリル学習に繰り返し取り組ませたことにより、漢字を正しく認識し、書ける児童が増えた。 ・一つの言葉について、他の使用場面を考えさせたり類義語で表現させたりしたことで、言葉の意味への理解が深まった。「ことばのたからばこ」を活用しながら日記を書く等、今後も言葉の理解を深める指導を継続していく。	

	算数	学数や長さ、広さ、かさについての大小関係は、概ね理解できている。 学繰り上がり、繰り下がりのある計算は、概ね理解できている。しかし、指を使って考える児童もおり、正確さや解く速さについては個人差が大きい。 学文章問題を読んで具体的な場面を想像し、量の増減を基に立式をすることについては、理解できている児童が多い。ただし、「どちらがどれだけ」の問いに対しては、文章の読み取りが十分でなく、正答を導き出すことができない児童が見られる。	・単元の学習時には理解している様子が見られるが、以前に習った単元の学習内容を忘れかけていることがあるのが課題である。 ・繰り上がり・繰り下がりの計算については、指を使って数えることで数え間違えたり解く速さが遅くなってしまったりすることが課題である。 ・「どちらがどれだけ」と２つのことを同時に問う問題で聞かれていることは何かを正しく理解し、正答を導き出すことに課題がある。	・以前に学習した内容を宿題として出したり、日常の生活の場面で既習事項を生かした発問をしたりする。さらに、タブレット端末を使ったドリル学習にも取り組ませる。それらにより、学習内容の定着を図る。 ・たし算やひき算の計算に繰り返し取り組む時間を設け、計算に慣れるようにする。また、自分で丸付けをしたり、タイムを計ったりして正確さや計算速度の向上を自覚させ、自信をもたせる。 ・文章題を解く際には、分かっていることと聞かれていることを確認する。さらに、数量の多寡や増減を考えさせることで、２つのことを同時に問う問題で、正しく意味を理解できるようにする。	・宿題や日常生活で以前に学習した内容に触れることで、既習事項について学びの定着を図ることができた。タブレット端末を活用した宿題を週末等に出し、繰り返し計算問題に取り組ませることで、正しく計算できる児童が増えた。課題のある児童に対しては、補充の学習を行い、基礎学力の定着を図っていく。 ・はじめは時間がかかっていたが、だんだんと計算に慣れ、素早さ、正確さの向上が見られた。今後は足し算、引き算の他、かけ算にも取り組ませていく。 ・文章問題の内容を読み、数を丸で囲んだり、重要な部分に線を引かせたりしたことで、題意を理解して、正しく立式できる児童が増えている。	
3	国語	調「説明文を読み取る」や「物語を読み取る」においては全国正答率を上回っているが、「文章を書く」は全国正答率を下回っている。 調「言葉の学習」において、全国正答率を下回っている。 学決められた言葉や文章を書き写すことには、意欲的に取り組む児童が多い。想像を広げ、考えを書くことに慣れていない児童が多く、書き出すことができない様子が見られる状況である。	・文章を書くことに苦手意識をもっている児童がおり、指定された長さで文章を書けるようにすることが課題である。 ・日常生活で使う言葉について、表記をし、平仮名・片仮名の使い分け理解できていない。語彙の量にも個人差が大きく、意味理解に課題がある。 ・書くことについて、何を、どの順に書いたらよいのかに戸惑う児童が多く、例文を示さないと書き出せないことが課題である。	・「書く」活動では、文章を書かせるときに目的意識をもって活動させる。そのために、週に１回、ベーシックタイムの時間にテーマを設定し、100 マス作文に取り組ませ、書いた作文を交流し互いのよさを認め合うことで自信をもたせる。 ・国語辞書を積極的に活用して、語彙の意味を理解し、適切に使えるようにする。学んだ言葉を使うことを意識させて活動に生かせるようにする。また、タブレット端末を使ったドリル学習で既習学習の定着を図る。 ・月に１回、文章の書き方や言葉の使い方について学べるよう、視写活動に取り組ませ、定着を図る。	・「書く」活動では、構成や文型の確認をしながら、60～100 字程度の短い文章を書く活動を取り入れている。課題に取り組む際は、必ずモデル文を用意し、構成や書く内容を捉えてから活動できるようにし、抵抗感なく取り組んでいる。 ・初めて触れる語彙や分からない言葉は、積極的に国語辞書を使う姿が以前より見られるようになった。また、タブレット端末を使ったドリル学習は引き続き取り組ませている。同じ問題を繰り返し解かせることで、既習学習の定着を図ることを目指す。 ・言葉の使い方や多くの文に触れることを目的に、毎日音読に取り組んでいる。 ・視写活動は、継続的に続けており、言葉や文章の書き方の基本を学ぶことに繋げている。	
	算数	調「かけ算」においては全国正答率を上回っているが、「たし算とひき算のひっ算」は全国正答率を下回っている。 調「図を使って考える」問題において、全国正答率を下回っている。 学かけ算九九については、概ね定着している。ただし、「いくつずつ」「いくつ分」についての理解が十分でない児童も見られる。	・繰り上がりや繰り下がりについて、書き方を混同してしまったりどこから繰り下げるとよいのか理解が十分でなかったりすることが課題である。 ・問題文の表す場面を読み取り、正しい図を作ることや、全体と部分の関係を基に加法・減法を選択することに課題がある。 ・文章問題を解く際、「○こずつ」など考えのきっかけとなる言葉を見付け、正しく立式することに課題がある。	・宿題の計算ドリルやタブレット端末のドリル学習を活用して、四則計算の練習に取り組ませて、計算力の向上を図る。 ・文章問題を解く際に、数直線をかくことで、どの部分を求めればよいかを視覚的に理解できるようにしてから立式させる指導を繰り返していく。 ・問題を正しく読み取れるよう、問題文に下線を引いたり囲んだりすることで、問題解決への見通しをもたせる。	・算数の時間には、常時活動に「チャレンジ計算」の時間を取り入れ、四則計算に取り組んでいる。タブレット端末のドリル学習は継続して活用している。同じ問題を繰り返し解き、簡単な計算の暗記にも繋がり、速く答えを出せるようになってきた。 ・問題文に取り組む際は、図や数直線等をかいてから、立式をするよう指導してきた。定着がまだ浅い児童に対しては、はじめは一緒に取り組み、類似問題を繰り返し取り組むことで正しい解き方を身に付けさせている。 ・図等にかき表した後には、言葉の式を書き、正確に問題を捉えられるようにしている。そうすることで、正しく立式をしたり、正しい式であることを確かめられたりすることができるようになってきている。	
4	国語	調基礎・活用とも全国平均正答率と同程度である。第３学年配当漢字を書く正答率が下回っている。 調「読むこと」の領域では、全国平均正答率を上回っている。説明文も物語文もいずれの正答率も全国平均を上回っている。校内研究の成果として「読むこと」の領域については良好であるが、語の意味について正しく理解していない児童がいる。 調「話し合いの内容を聞き取る」「メモをもとに文章を書く」については目標値を下回っている。 学「読み取ること」は良好だが、「書くこと」「漢字の学習」についての理解が十分でない児童も見られる。	・第３学年配当の漢字について、正しく書くことに課題がある。また、文章中に活用して書けるような指導が必要である。 ・聞き取ったことを指定された長さで文章を書くことに課題がある。 ・「書くこと」についての苦手意識が高く、特に情報の扱い方に関する事項に課題が見られる。	・タブレット端末を使ったドリル学習に繰り返し取り組ませることで、理解の定着を図る。また、ノート指導を丁寧に行い、文章を書く際に既習の漢字を使うことを推奨していく。 ・読むことについては、授業中や宿題に音読を取り入れるなどし、言葉に慣れ親しませるようにしていく。また、国語だけでなく、総合的な学習の時間などの調べ学習でも、国語辞典を引く機会を多く取り入れ、語彙の定着を図る。 ・書くことについては、短い文章で自分の考えや感想を書く活動を設定して児童の苦手意識を克服し、書くことへの見通しがもてるようにする。得た情報を 3～4 文程度の長さでまとめ、文章を書くことに慣れる指導を行う。	・漢字については、タブレット端末を使ったドリル学習やフラッシュ、プリント学習を毎日行うことで、理解の定着が見られた。しかし、文章中に活用するまでには至っていない児童が一定数おり、活用力を高めることができるよう引き続き指導を続けていく必要がある。 ・読むことについては、毎日の音読や授業中のぶつぶつ読み、漢字フラッシュなどを行うことで、定着が見られた。また、単元の初めに国語辞典を使って意味調べを行うことで、語彙の定着も見られるようになってきた。 ・書くことについては、自分の考えや感想を書く活動をほぼ毎日設定することで、抵抗なく書くことができるようになってきた。今後は、より分かりやすい文章で表現できるよう指導を続けていく。	

	算数	調基礎・活用とも全国正平均答率を大きく上回り良好である。 ３観点ごとの正答率を見てもいずれも全国平均正答率を上回っている。 調３位数の加法減法の筆算については、目標値を下回っている。また、図形の領域も全国平均正答率を下回っている。描図に苦手意識が見られる。 学繰り上がりや繰り下がりの筆算場面で正しく計算できない児童がいる。また、文章題の立式に苦手意識をもった児童がいる。	・四則計算の習得に課題がある児童が目立つ。立式及び計算でケアレスミスが多く、四則計算を正しくすることに課題がある。 ・図形の性質を理解し、定規やコンパスを活用して、作図をすることに課題が見られる。 ・文章題において、「何を問われているのか」「分からない数は何であるか」を正しく把握することに課題がある。文章の読み取りと関連して指導が必要である。	・授業の中で、四則計算の小テストに毎回取り組ませることで、たし算・ひき算の定着を深め、四則計算への自信をもたせるとともにかけ算・わり算の習得を図る。 ・定規やコンパスなどの使い方を身に付けるとともに、タブレット端末を使って作図の手順を視覚的に理解できるよう支援し、理解の定着を図る。 ・文章題を読む際に児童とともに「問い」について確認し、共通理解できるようにする。また、立式する際に図や線分図を用いて視覚的に分かりやすくするとともに、分からない数を□とし、何を求めればよいのかを明示する。	・授業の中で、毎時間四則計算の小テストに取り組むことで、正しく計算することができるようになった。処理速度については、個人差が見られる。 ・分度器の使い方については、正しく角度を測ったり、作図したりすることに課題がある児童が一定数見られた。今後もタブレット端末を使って作図の手順を視覚的に理解できるよう支援し、繰り返し復習することで、定着を図っていく。 ・文章題において、「何を問われているのか」「分からない数は何であるか」を確認し、線分図を用いて整理する活動に取り組んだ。しかし、線分図に表すことができなかったり、図から立式できなかったりする児童も多く、引き続き線分図や図をかく活動を通して丁寧に指導していく必要がある。	
５	国語	調「知識・技能」「思考・判断・表現」の正答率が全国を上回る一方、「主体的に学習に取り組む態度」の正答率が全国を下回った。 調「書くこと」においては、全国の正答率を大きく下回っている。 学既習した漢字・言語を適切に用いることが十分でない児童が見られる。	・「書くこと」の苦手意識は減ったが、目的や必要に応じて書くことや、何をどのように書くのかという見通しをもつことに課題がある。適切な言葉を使ったり、着目する言葉を見付けたりすることを改めて指導していく必要がある。 ・既習漢字について、正しく読むことや書くこと、活用に課題がある。また、文章に取り入れて書けるような指導が必要である。	・「書くこと」への抵抗感を減らしたり、どのように書くかの見通しをもたせたりするために、文章を書く際に定型文を提示したり、書き出しを提示したりする。 ・授業の中で新出漢字や間違えやすい漢字について触れる機会を増やし、漢字の読み書きの力を定着させる。また、家庭学習に音読を入れることで漢字を読むことに慣れさせる。 ・家庭学習を中心に授業時間でもタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、学習の定着を図る。	・「書くこと」において、定型文や書き出しを提示することで、文章を書くことへの抵抗感が減ってきた。 ・タブレット端末を活用し、既習漢字の復習を繰り返し行った結果、少しずつ定着してきている。また、家庭学習ではなく、各教科において教科書を中心に授業で音読を取り入れ漢字や文章に慣れ親しむようにした結果、既習の漢字を正しく読んだり文節を意識した音読ができたりしてきた。 ・文章を書くときに、既習漢字を使うのを忘れてしまう児童が多くいる。習った漢字を使っていない場合は、下線を引き、漢字で書くように促している。また、漢字の定着を図るために、引き続きタブレット端末を使ったドリル学習を行うことで、書くことができる漢字を増やしていく。	
	算数	調すべての観点において全国や新宿区の正答率を上回り、「思考・判断・表現」の正答率が全国を最も上回った。 学「数と計算」の正答率は全国を上回っているが、わり算の性質の理解が十分でない児童が見られる。 学数の大きさなど数量的な見取りが苦手な児童がいる。	・問題の捉え違いや単位忘れなど見られることが課題である。 ・特にわり算の性質を応用して小数のわり算、分数のわり算の計算の仕方の理解に課題がある。 ・大きな数や小数、面積などでは、数量的感覚を働かせ、大きさの見当や見通しをもって問題に取り組むことに課題がある。	・家庭学習を中心に授業時間でもタブレット端末を使ったドリル学習に取り組ませることで、理解の定着を図る。 ・小数点の位置や単位など見直すときのポイントを示す。 ・かけ算九九やわり算などの習得が十分ではない児童に対し、個別に家庭学習に加えるなど丁寧に対応し、基礎学力の定着を図る。 ・大きい数を扱う時に、位を確認したり概数での表し方を確認したりする場を設ける。	・家庭学習を中心にタブレット端末を使ったドリル学習に取り組んできた。しかし、問題を間違えた場合、どこで間違えたかが分かりづらく、指導に生かしづらい面もあった。今後は、ドリルとタブレット端末を併用して取り組ませ、理解の定着を図る。 ・個別の家庭学習を設けたが、かけ算やわり算の習得が十分でない児童がまだいる。タブレット端末のカルテを活用し、個に応じた問題を繰り返し取り組ませ定着を図る。 ・学習中の単元に関係する前学年までの既習事項や前時までの学習内容を、授業始めに復習したり板書で強調したりしてきたことで、大きい数を扱う際は位に注目できる児童が増えた。定期的に確認することで、一層の定着を図る。	

6	国語	調漢字を正しく読むことや物語の内容を読み取ることは目標値を上回ったが、「話すこと・聞くこと」において、全国と新宿区の正答率を下回っている。 調「情報の扱い方」において、全国の正答率を下回っている。 学叙述をもとに、自分の意見を筋道立てて説明する力が十分ではない。 学既習した漢字・言語を適切に用いることが十分ではない。	・「話すこと」よりも「聞くこと」において、聞こうとする意識が低く、指示が伝わらないことがあることが課題である。 ・原因と結果など、情報と情報の関係を正しく理解していくことに課題がある。 ・自分の考えを叙述をもとに相手に分かりやすく説明することに課題がある。 ・低学年、中学年で習った漢字が定着していないことが課題である。	・必要に応じて、聴写の活動をとるようにしていく。話を聞くときは、最後まで聞くことを教師側が意識して、児童一人一人を見て話を聞くことを行っていく。 ・授業の中で、キーワードとなる文章を丁寧に読み取っていく活動を行い、文と文との関係をとらえられるようにしていく。 ・問題解決的学習を取り入れ、自分の考え→友達との交流→全体共有の流れを一単位時間内に取り入れる。特に、友達との交流に力を入れ、聞き手にどのように伝わったのか理解できるやり取りする活動を行う。 ・タブレット端末とプリントを個の実態に応じて活用することで既習事項の漢字の習熟を図る。	・話を聞くことについては課題が残るため、引き続き指導の重点とする。話を始める前に一人一人と目を合わせて聞く姿勢を作ることを心掛けてきたが、話の途中で無駄話を始めることがあった。そのため、あらかじめポイントを絞って指示を簡潔にできるようにしていく。また、聴写については、週の初めの連絡ノートに必要事項を書いている。子供たちにとって、必然性のある話なので、話を聞いて書くきっかけになっている。 ・少しずつ学習の中で大切な言葉や文章があることに児童たちは気が付くようになった。引き続き、キーワードを丁寧に読み取っていく活動を取り入れていく。 ・問題解決学習を取り入れて指導している。教科書の叙述を基に自分の考えを書く活動をしており、理由を叙述から考えることが身に付いてきている。自分の考えを書くだけで満足することが多く、友達との交流を通して考えがより深まったり、広がったりして、いくよう指導を継続していく。 ・タブレット端末を活用し、漢字の習熟を図った結果、ノートの記帳の際に、既習漢字を使うようになっている。	
	算数	調「整数のなかま分け」では全国正答率を上回り、基礎学力の定着が見られるが、「データの活用」において、新宿区の平均を下回っている。 学小数のわり算やかけ算の際に、小数点を書き忘れたり、小数点の位置を間違えたりする児童がいる。	・データを活用しながら、既習事項を生かして問題を解決する力が身に付けられていない。 ・整数では正確に問題を解けるが、小数や分数が入ってくることで解答できなくなってしまうことが課題である。	・データから読み取れることだけでなく、そこから何を考えたのかという思考を育てることを行う。 ・計算の仕方の基礎をおさえること、問題の見直しを徹底することを指導していく。 ・タブレット端末とプリントを個の実態に応じて活用することで基礎的な知識の定着を図る。	・データの活用の授業では、表計算ソフトを用いてデータ処理の活用を行った。データを整理することで、新しいことに気が付くきっかけとなった。全体の指導時間が少なかったので、今後もデータを活用する授業を取り入れていく。 ・授業のはじめに四則計算に取り組む「タイムチャレンジ」を行っているため、子どもたちの計算力は身に付いていおり、引き続き指導していく。 ・タブレット端末のドリル学習は継続して活用している。似たような問題を繰り返し解くことで、復習になり計算力の定着に繋がっている。	
音楽		学音楽が好き、もっともっと楽しみたいと考える児童が多い。 学音符やリコーダーや鍵盤の運指を理解しているなど基礎的な能力が身に付いている児童はいるが、読譜や器楽の奏法で苦手意識を感じる児童もいる。	・楽器の基本的な奏法は身に付き始めているが、まだ苦手な意識があり奏法が十分に身に付いていないことが課題である。 ・地声ではなくなってきたが、音程や音量に課題が残る。	・様々な器楽指導を行い、苦手意識を少しずつ減らしていく。また、タブレット端末を活用し、手元を映した動画などを配信し、個別で練習ができるようにする。 ・コロナ禍ということもありハミングを用いた練習で頭声発声を目指す。聴く活動を通して音程を合わせられるようにしていく。	・タブレットを使用した演奏動画の配信は個人練習に生かせたようで、児童一人一人の演奏技能向上に役立てることができた。 ・マスク着用で歌唱ができるようになり、頭声発声を意識した歌唱ができるようになってきている。引き続き指導していく。	
図工		学豊かな発想をする児童が多いが、中にはなかなかイメージが浮かばない児童がいる。 学イメージをもつことはできるが、どのように表したらよいか分からない児童がいる。	・自分の様々な体験を作品づくりに生かすことに課題がある。 ・はさみやのこぎりなどの切る道具や絵の具やクレヨン等の描画の道具を、自分の思い通りに使いこなせていないことが課題である。	・表現の幅を広げるために様々な作例を、タブレット端末やＩＣＴ機器を活用して示し、自由な発想ができるようにする。 ・既習の道具の使い方を授業の初めに使い方の確認をしたり思い出したりするための時間を設け、繰り返し取り組むことで操作がスムーズにできるようにする。	・ICT 機器を使い、作例を提示するだけではなく、参考になるような資料を提示した。そこから、自分の体験したことを思い出し、発想を広げている児童もいた。 ・初めて使う道具を使用するときは、少人数ずつ集めて動作を一つ一つ確認しながら教えた。自信をもって道具を使える児童が増えた。	
特支						

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況　学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況　※分量は 2 ページ以上となってもよい。